

あね さき ひがし はら
市原市姉崎東原遺跡C地点

1 9 9 4

株式会社 大 和 建 設
財団法人 市原市文化財センター

序 文

市原市は千葉県のほぼ中央部に位置し、東京湾に注ぐ養老川により、広い沖積低地が形成されています。また、養老川河口付近の台地上には上総国分寺をはじめとする数多くの重要な文化財が散在しています。こうした遺跡に対する発掘調査成果は年々蓄積されており、当地が遠い昔から上総国の中心地として栄え、原始、古代より現在に至るまで民衆の生活も盛んに営まれてきたことが明らかになってまいりました。

今回実施された姉崎東原遺跡C地点における発掘調査は、宅地造成工事に先行し、遺跡の記録保存を目的として実施されたものであります。本遺跡は、その周辺に大規模な前方後円墳が散在し、上海上国国造の奥津城とされる姉崎古墳群内に立地しています。近隣には「延喜式神名帳」などの文献史料に見える姉崎神社や、県指定文化財の姉崎天神山古墳を始めとする多くの貴重な文化財が知られ、養老川流域の政治・文化的な要として考古学的に注目されている地域です。更に姉崎地区は、中世戦国期に真里谷武田氏・後北条氏・里見氏などの外来勢力が相次いで進出し、幾つかの城館が築城・整備されたものと考えられます。東原遺跡についても中世遺構との関連で捉えうる可能性があるようです。

東原遺跡C地点は大部分が竹の密生する斜面地であり、500m²という極めて限定された範囲に調査が絞られましたが、整地遺構の検出など多くの成果を得ることができました。今後この報告書が文化財の保護・活用に少しでも役立てられることを期待しております。

最後に、調査および報告書刊行にいたるまで多大な御協力をいただきました、株式会社大和建設、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課はじめ関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成6年10月

財団法人 市原市文化財センター
理事長 佐 野 年 男

例 言

1. 本書は株式会社大和建设による千葉縣市原市姉崎地区の宅地造成に先行して実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、千葉縣市原市姉崎2720-3地先他に所在する姉崎東原遺跡C地点の記録保存を目的として実施された。
3. 発掘調査は、株式会社大和建设の委託により、財団法人市原市文化財センターが実施した。
4. 調査対象面積は5,000㎡であり、このうち10%の500㎡に対し本調査を実施した。
5. 発掘調査と整理作業は次のとおりに行なった。

発掘調査	平成6年2月3日～平成6年3月22日
担当者	櫻井敦史
整理作業	平成6年4月1日～平成6年4月30日
担当者	櫻井敦史
6. 本書の執筆、作成は櫻井が行なった。
7. 姉崎東原遺跡C地点の財団法人市原市文化財センターにおける調査コードは、「セ181」である。
8. 挿図での上方向及び調査グリットの基準は座標北を表す。
9. 土層説明図などの基準高度は海拔数値である。

本文目次

序文

例言

財団法人市原市文化財センター組織表

1. 遺跡の立地と環境	1
2. 調査の概要	1
3. 調査した遺構	5
(1) B地点隣接地区	5
(2) 台地斜面部	9
(3) 北東調査区	10
4. 出土遺物	10
(1) 縄文土器	10
(2) 弥生土器	11
(3) 土師器	14
(4) 中・近世陶器	14
(5) 石器	16
5. 結び	17

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 姉崎東原遺跡周辺地形図	3
第3図 姉崎東原遺跡調査地区	4
第4図 東原遺跡C地点遺構配置図	5
第5図 1・2・3・4・5・6・7号遺構配置図	6
第6図 7・8・9・10・11・12号遺構配置図	7
第7図 1・2・3・4・5・6号トレンチ配置図	8
第8図 1号トレンチ土層断面図	9
第9図 7・8・9・10号トレンチ配置図	10
第10図 7・9・10号トレンチ土層断面図	11
第11図 12・13・14・15・16号トレンチ配置図	12
第12図 12・13・14号トレンチ土層断面図	13
第13図 東原遺跡C地点出土遺物実測図1	15
第14図 東原遺跡C地点出土遺物実測図2	16

財団法人市原市文化財センター組織表

平成5年度（調査）

役 員

理 事 長	植 草 久 善（教育委員会教育長）
副理事長	田 中 信 雄（教育委員会社会教育部長）
常務理事	鈴 木 太 郎（専任）
理 事	加 藤 晋 平（國學院大學教授）
理 事	寺 村 光 晴（和洋女子大学教授）
理 事	木 村 千 春（郷土史家）
理 事	佐 野 年 男（市企画部長）
理 事	落 合 泰（市総務部長）
理 事	加 瀬 睦 郎（市財務部長）
理 事	田 中 俊 夫（市都市計画部長）
監 事	中 村 知 之（市出納室長）
監 事	深 澤 和 良（教育委員会総務課長）

職 員

庶務課	
課 長	田 丸 萬 富
主 事	大 鐘 光 江
主 事	阿 部 茂 之
調査課	
課 長	米 田 耕之助
主任調査研究員	田 中 清 美
調査研究員	大 村 直
調査研究員	高 橋 康 男
調査研究員	木 對 和 紀
調査研究員	忍 澤 成 視
調査研究員	田 中 茂 良
調査研究員	小 川 浩 一
調査研究員	櫻 井 敦 史
調査研究員(嘱託)	半 田 堅 三
主 事	高 浦 貞 子

平成6年度（整理）

役 員

理 事 長	佐 野 年 男（専任）
副理事長	山 口 唯 一（教育委員会生涯学習部長）
常務理事	鈴 木 太 郎（専任）
理 事	加 藤 晋 平（國學院大學教授）
理 事	寺 村 光 晴（和洋女子大学教授）
理 事	木 村 千 春（郷土史家）
理 事	植 草 久 善（教育委員会教育長）6.7.14逝去まで
理 事	大 野 皎（教育委員会教育長）6.9.19より
理 事	石 井 作 二（市企画部長）
理 事	加 瀬 睦 郎（市総務部長）
理 事	田 中 俊 夫（市都市計画部長）
監 事	斎 藤 初 男（市出納室長）
監 事	田 邊 義 夫（教育委員会総務課長）

職 員

庶務課	
課 長	古 宮 祐 助
主 事	大 鐘 光 江
主 事	阿 部 茂 之
調査課	
課 長	米 田 耕之助
係 長	田 中 清 美
主任調査研究員	大 村 直
主任調査研究員	小 出 紳 夫
主任調査研究員	田 所 真
調査研究員	忍 澤 成 視
調査研究員	小 川 浩 一
調査研究員	櫻 井 敦 史
調査研究員(嘱託)	半 田 堅 三
主 事	高 浦 貞 子

1. 遺跡の立地と環境

姉崎東原遺跡C地点は、市原市姉崎2720-3地先他に所在する。遺跡は養老川下流域南岸の沖積低地と東京湾に接する海岸平野の合流する低地に面した台地上及び東南斜面に位置している。本遺跡の立地する台地は姉崎台と呼ばれ、標高約33m前後で北面する沖積平野との比高差が約20mに達し、東西を樹枝状に伸びる谷によって開析されている。今回の調査区は、平成4年度の調査により弥生中・後期の集落跡及び古墳時代前期の墓域などが検出された東原遺跡B地点に接し、大半を台地上から低地に至る斜面地で占めている。

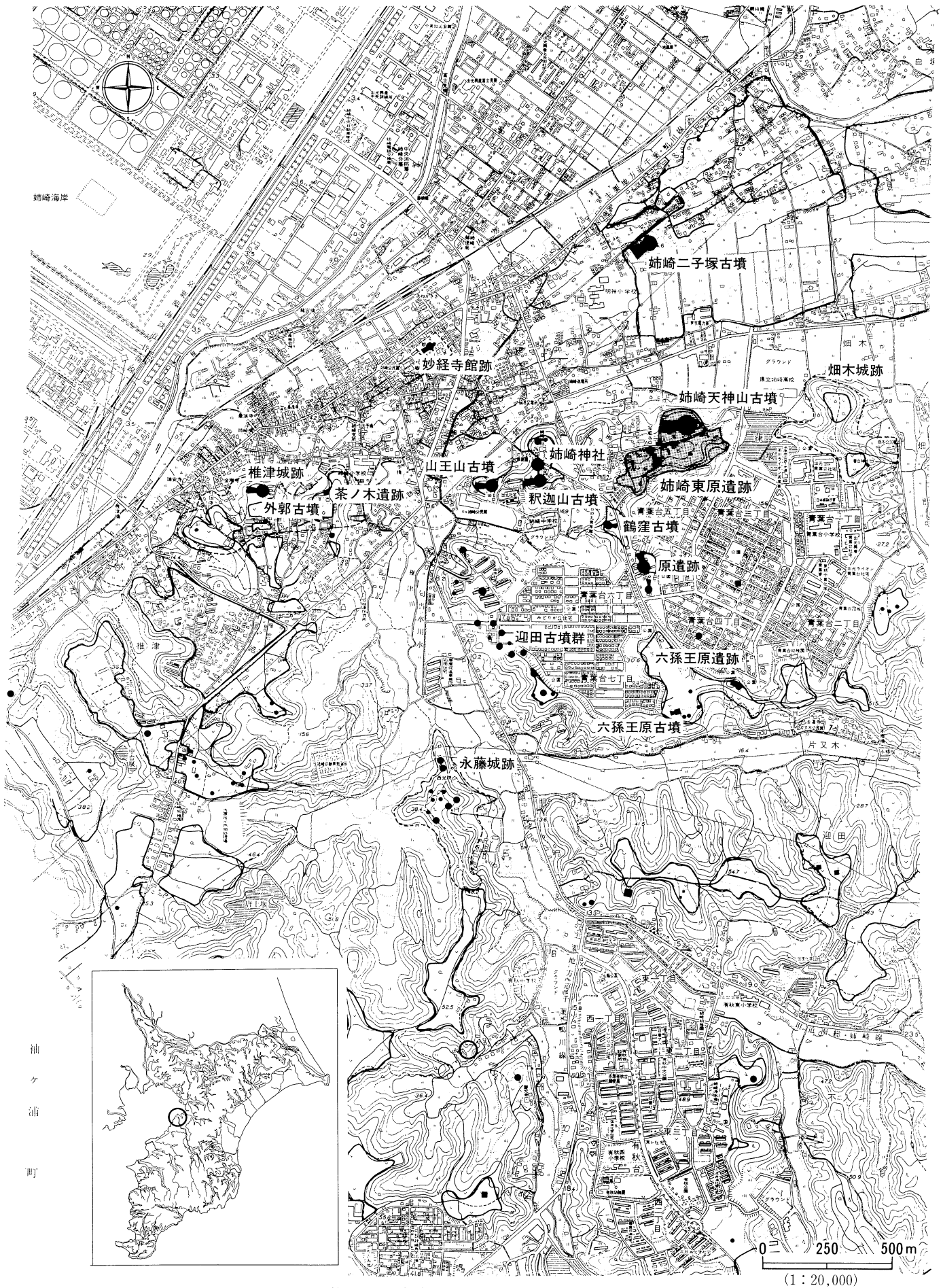
周辺遺跡としては県指定文化財の姉崎天神山古墳が本遺跡に隣接し、平成4年度B地点調査に際し検出された前方後方墳との関連をどう捉えるかという問題がある。本遺跡は天神山古墳とともに姉崎古墳群として包括されるものであり、古墳群形成の全体的な流れの中に位置付けて遺跡自体の性格を理解していく必要があろう。また、同台地上には姉崎台貝塚が存在し、縄文早・中・後期の土器が散布している。今後の調査による資料の蓄積が待たれよう。台地上を更に西へ向かうと式内社の姉崎神社が鎮座する。昭和61年度の社殿新築に伴う調査により、建替えを含めた多数の掘立柱建物跡ほか竪穴住居跡などが検出された。更に周辺に目をやると、山王山古墳・釈迦山古墳・鶴窪古墳・六孫王原古墳・姉崎二子塚古墳などの大型古墳が存在し、資料上の制約から姉崎神社成立の背景および関連は定かでないものの、古墳時代より当地が上総の政治・文化的要所であった事実が垣間見られよう。なお、近辺に椎津城・永藤城・妙経寺館跡などの中世城館跡が多数確認できるうえ、東側小谷を挟む台地には畑木城跡があり、東原遺跡東南斜面に見られる帯曲輪状の整地跡を城郭関連遺構として捉える意見もある。

2. 調査の概要

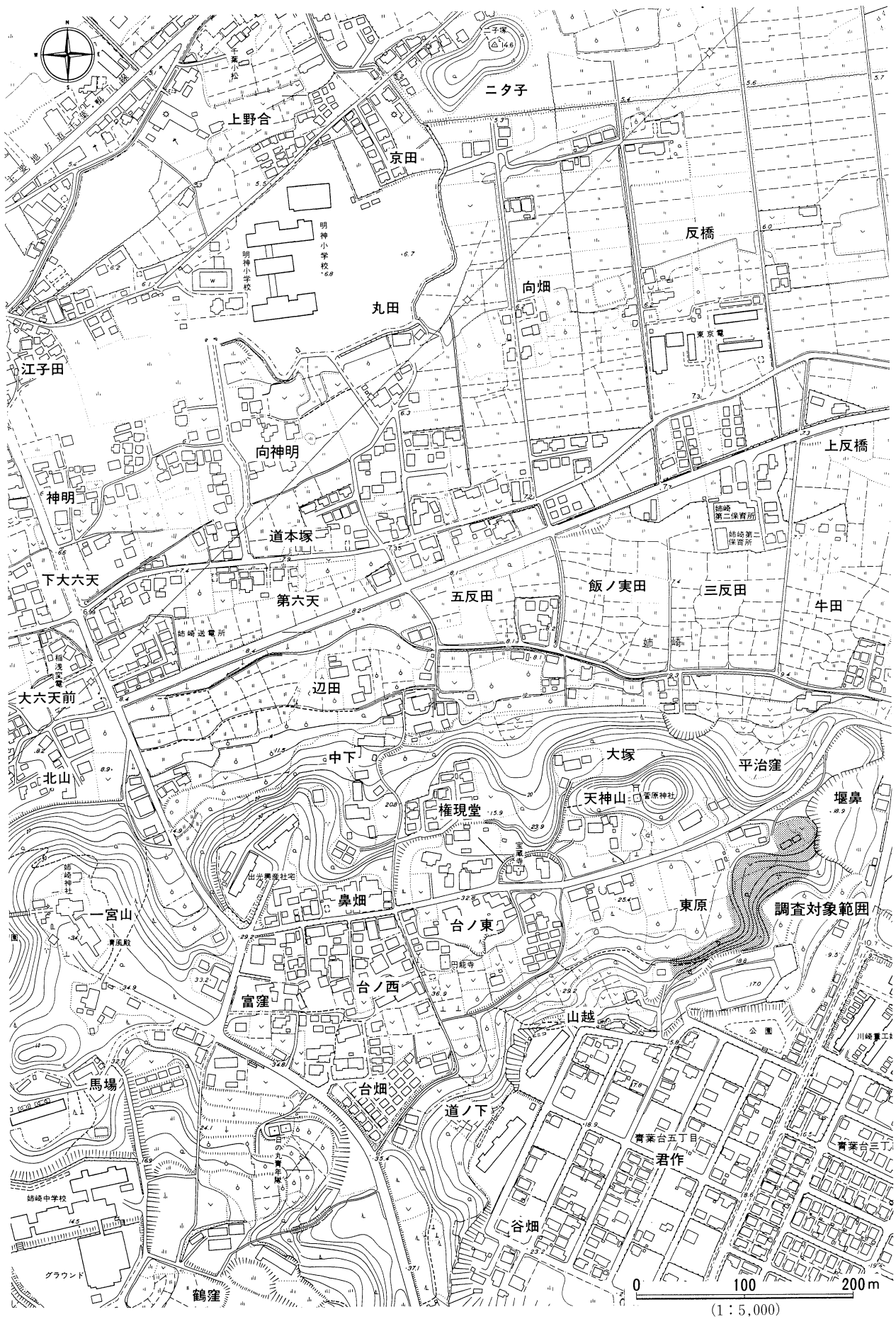
本調査範囲は、円墳1基を含んだ東原遺跡B地点に接する地区の他、大部分が台地斜面部を占めるものである。台地南東斜面部は先に述べたとおり約300mにわたる帯曲輪状の整地跡が確認でき、これを中世城郭関連遺構とも推定し得ることから、城館跡に関わる遺構の検出が想定されていた。

B地点隣接地区は全面発掘を行ない、円墳周溝をはじめ、住居跡・掘立柱建物跡などが検出された。斜面部においては16本設定したトレンチ内の調査に止め、整地痕のほか住居跡などの検出をみた。また、台地東端に位置する北東調査区では既に削平のためローム面が露出しており、遺構は確認されなかった。

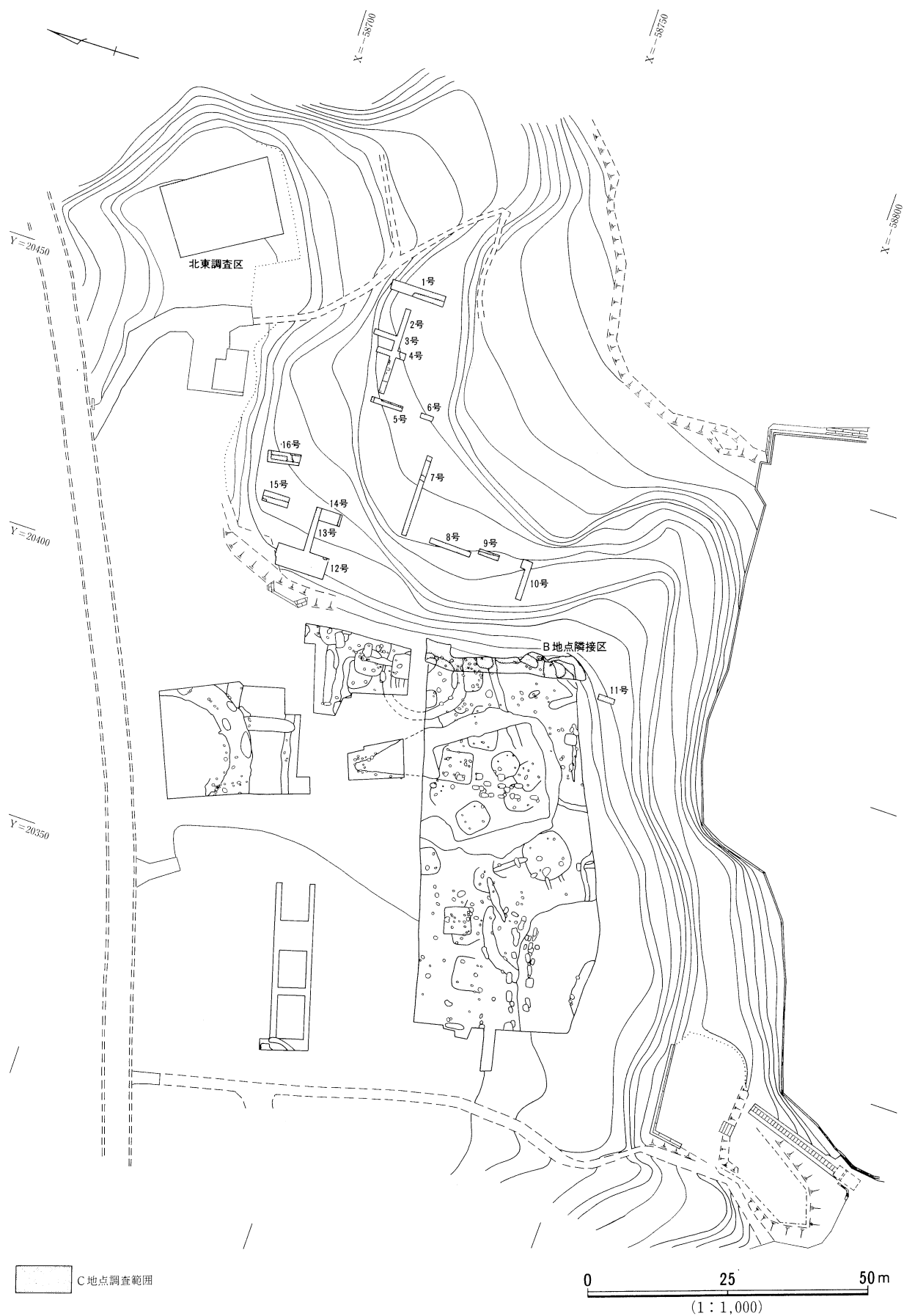
B地点隣接地区においては姉崎天神山古墳築造に際する土取りのためか、現表土を除去するとローム層が現れる状態であり、掘込みの浅い遺構について湮滅の可能性も考慮しなければならない。加えて台地傾斜変換面という立地上の問題もあるが、B地点と比較しても全体的に遺構の密度は薄く、残存状態も良好でなかった。なお、調査前に想定されていた城館との関連を具体的に示す遺構は検出するに至らなかった。斜面部に設定したそれぞれのトレンチより度重なる整地跡が断面で観察されたものの、現状で時期・性格などは不明と言わざるを得ない。



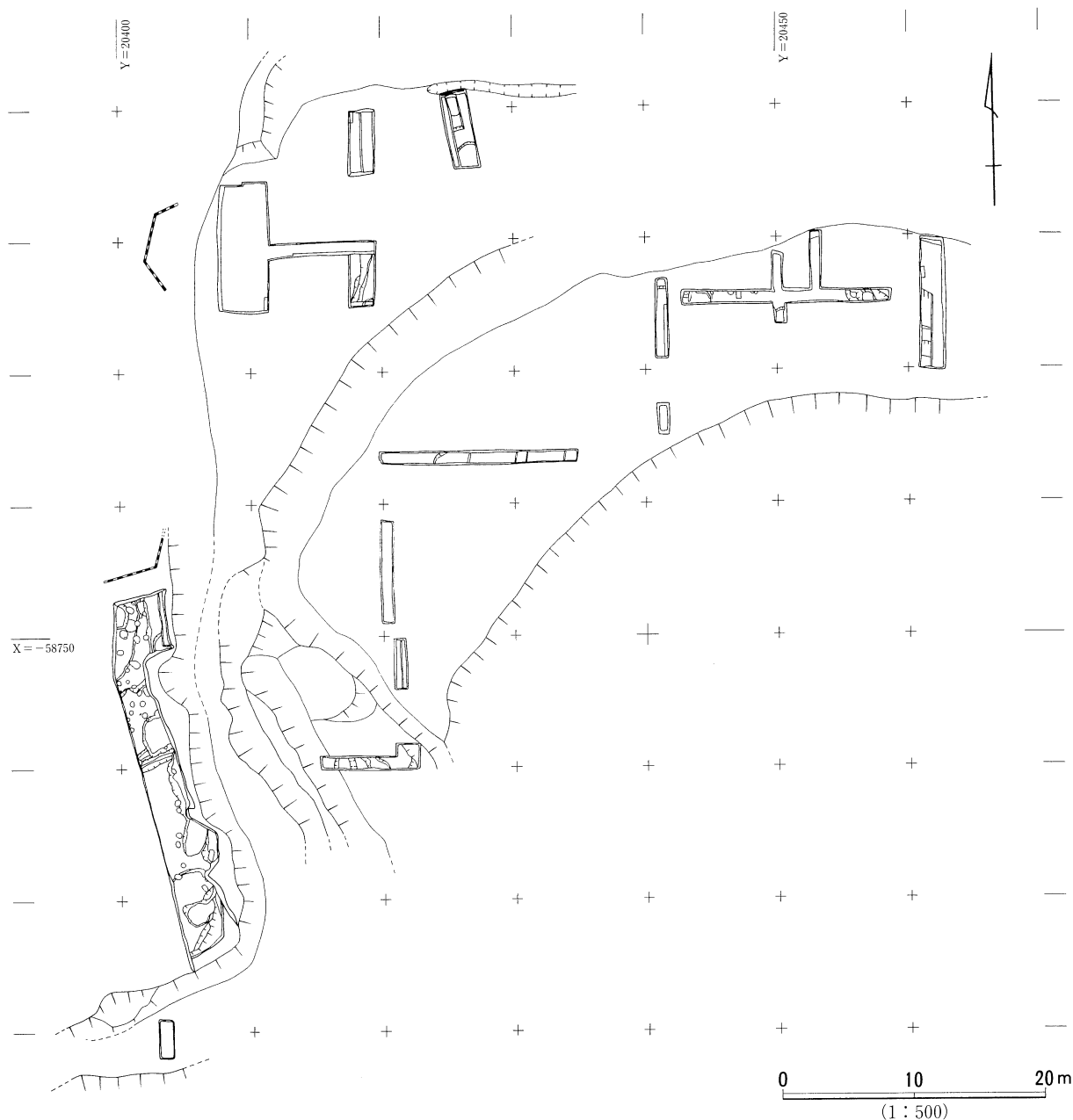
第1 図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 姉崎東原遺跡周辺地形図



第3図 姉崎東原遺跡調査地区



第4図 東原遺跡C地点遺構配置図

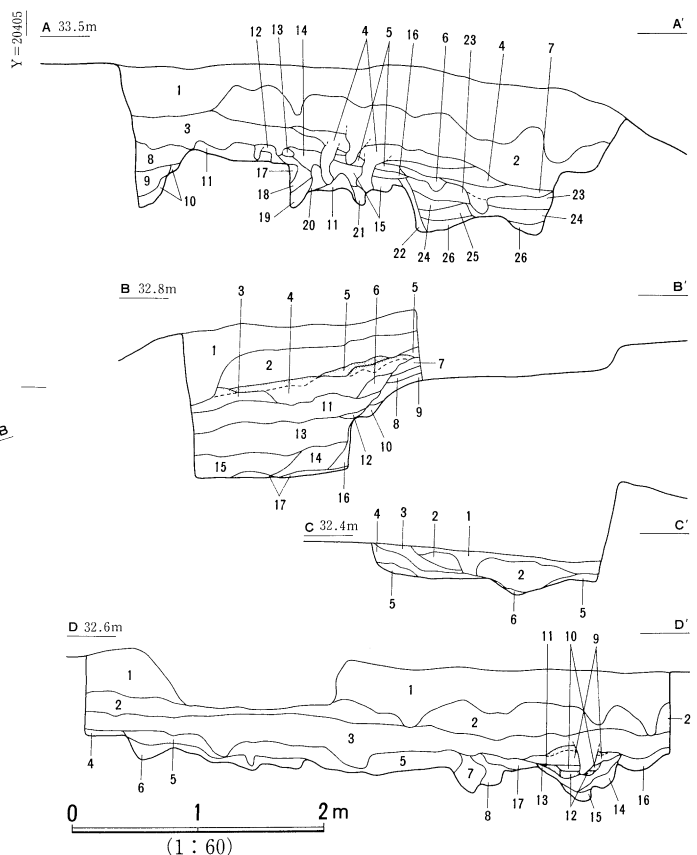
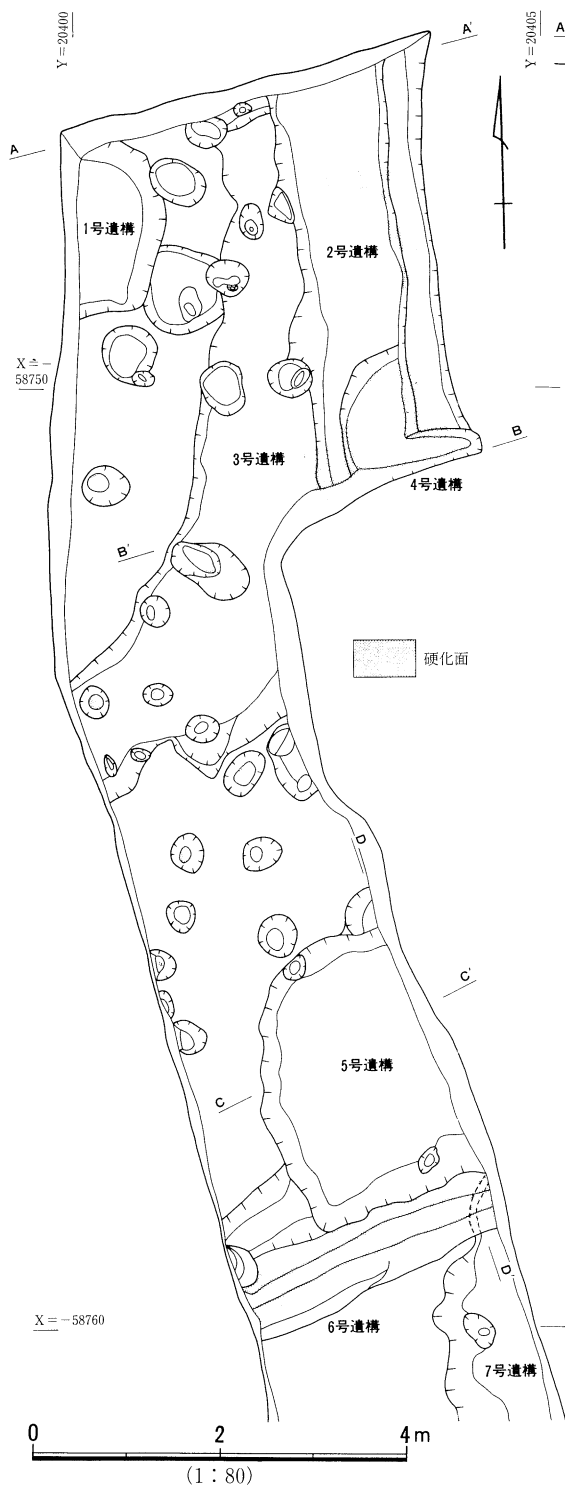
3. 調査した遺構

(1) B地点隣接地区 (第5・6図)

この調査区では、円墳の周溝の一部と、竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡2棟・土坑4基(1・4・5・12号遺構)・道遺構3条のほか、北よりに多くのピットが検出された。これらのピットの中には柱当りが確認されるものも存在するが(図中、アミ部)、柱穴としての相互の関連は不明である。なお、東側の傾斜変換面では、切り土によるテラス状の整地跡(2・7・9号遺構)が検出された。

2号遺構(第5図)

テラス状の切り土整地跡。整地の結果、一部3号遺構が破壊されている。テラスの埋没過程において道として利用されたようで、硬化面を有する。



第5図セクション図

土層説明 (A, A')

1. 暗褐色、現表土。
2. 5mm大のロームブロック散る暗褐色土。
3. 1層よりやや褐色味強い暗褐色土。
4. 暗褐色土。
5. 暗褐色土。
6. 4層よりやや有機質性強い暗褐色土。
7. 極暗褐色。
8. 1cm大のロームブロック散る茶褐色土。
9. 1cm大のロームブロック散る暗茶褐色土。
10. 2cm大のロームブロック多く散る茶褐色土。
11. 明茶褐色土。
12. 暗茶褐色土。
13. 暗茶褐色土。
14. 3層より褐色味強い暗褐色土。
15. 茶褐色土。
16. 2層よりやや有機質性強い暗褐色土。
17. 暗茶褐色土。
18. 14層よりやや褐色味強い暗褐色土。
19. 暗茶褐色土。
20. 19層よりやや褐色味ある暗茶褐色土。
21. 茶褐色土。
22. 5mm～1cm大のロームブロック多く含む明茶褐色土。
23. 6層より褐色味強く3mm大のロームブロック多く散る暗褐色土。焼土粒微量含む。
24. 1cm大のロームブロック多く含む暗褐色土。
25. 24層より有機質性強く1cm大のロームブロック散る暗褐色土。
26. 22層よりやや有機質性強い茶褐色土。

土層説明 (C, C')

1. 極暗褐色土。
2. 暗褐色土。
3. 茶褐色土。
4. 1cm大のロームブロック散る茶褐色土。
5. 明茶褐色土。
6. 暗茶褐色土。

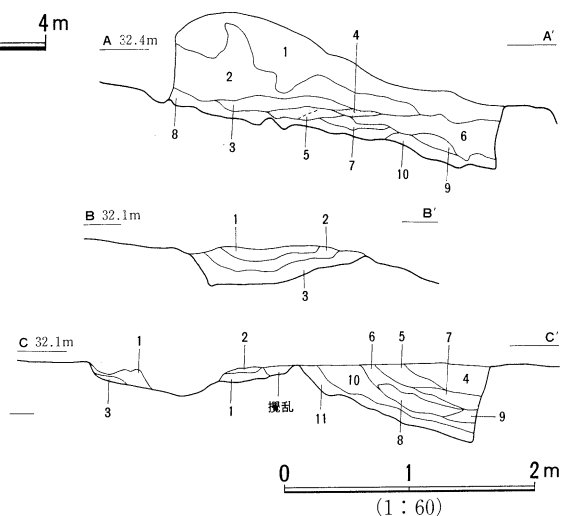
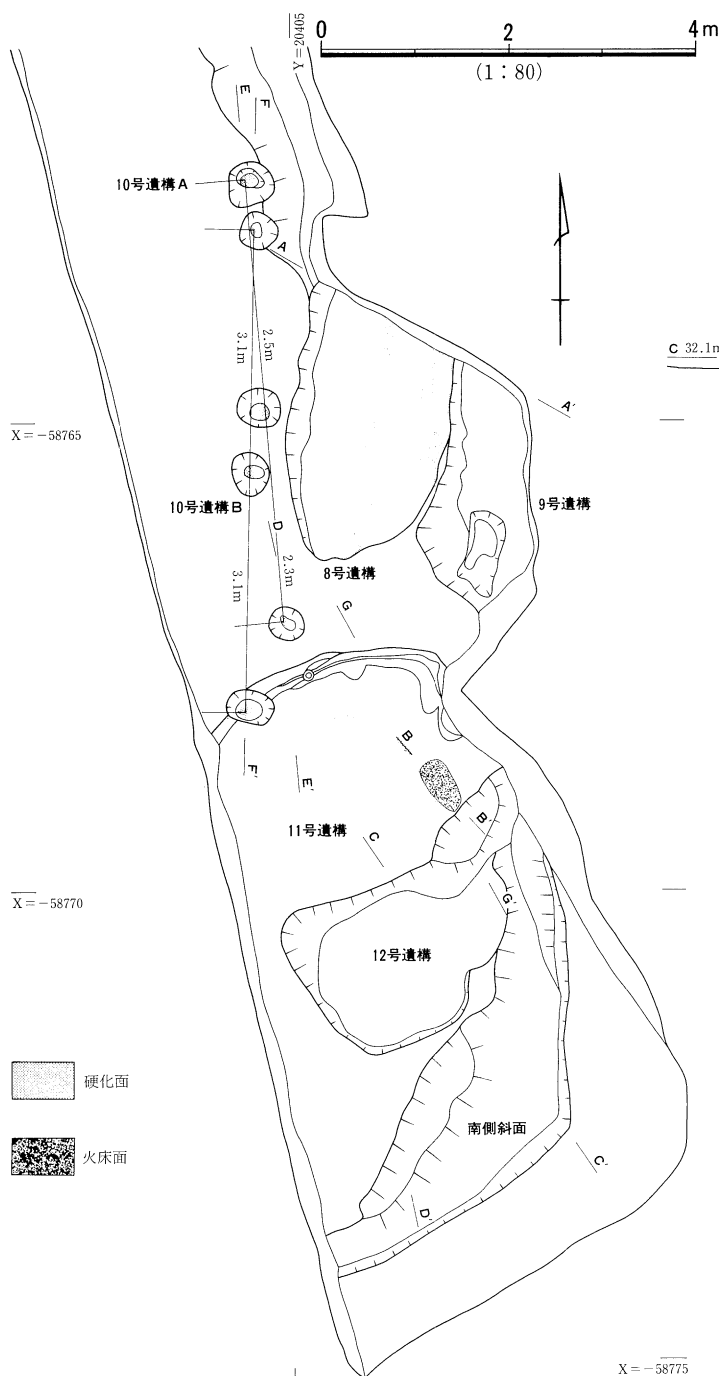
土層説明 (B, B')

1. 暗褐色、現表土。
2. 5mm大のロームブロック散る暗褐色土。
3. 暗褐色土。一部硬化する。
4. 1mm～5mm大のロームブロックを多く含む一部硬化する極暗褐色土。
5. 1mm～3mm大のロームブロック多く散り焼土粒少量含む暗褐色土。一部硬化する。
6. 暗褐色土。
7. 2mm～3mm大のロームブロック少量散る暗褐色土。
8. 暗褐色土。7層より褐色味強い。
9. 茶褐色土。
10. 暗褐色土。
11. 5mm大のロームブロック多く含む暗褐色土。
12. 暗褐色土。10層より有機質性強い。
13. 暗褐色土。
14. 3cm～5cm大のロームブロック散る暗褐色土。
15. 暗褐色土。13層より有機質性強い。
16. ローム多く含む暗褐色土。
17. 茶褐色土。

土層説明 (D, D')

1. 暗褐色、現表土。
2. 焼土粒微量散る極暗褐色土。
3. 極暗褐色土。
4. 暗褐色土。
5. 暗茶褐色土。
6. 茶褐色土。
7. 5mm大のロームブロック多く散る極暗褐色土。
8. 暗茶褐色土。
9. 5mm大の焼土ブロック1個含む暗茶褐色土。一部硬化する。
10. 9層よりやや褐色味強い暗褐色土。
11. 茶褐色土。硬化している。
12. 極暗褐色土。硬化している。
13. 極暗褐色土。8mm大の焼土ブロック1個含む。
14. 暗褐色土。
15. 14層より褐色味強い暗褐色土。
16. 暗褐色土。
17. 5mm大のロームブロック多く散る暗褐色土。

第5図 1・2・3・4・5・6・7号遺構配置図



第6図土層断面図

土層説明 (A, A')

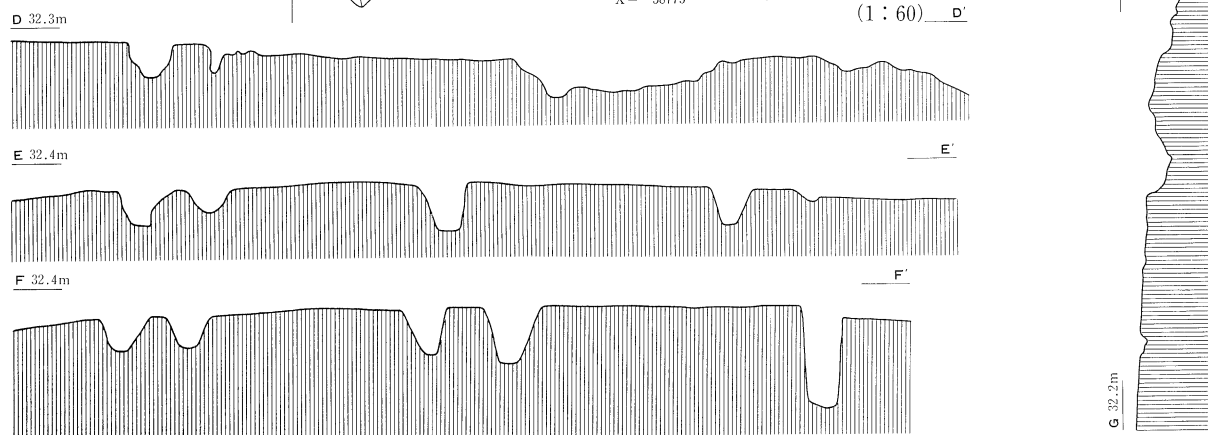
1. 暗褐色、現表土。
2. 暗褐色土。焼土粒少量散る。
3. 暗褐色土。
4. 極暗褐色土。硬化している。
5. 3mm大のロームブロック散る暗褐色土。一部硬化している。
6. 1cm大のロームブロック少量散る極暗褐色土。
7. 暗褐色土。
8. 2層より褐色味強い暗褐色土。
9. 暗褐色土。
10. 暗茶褐色土。

土層説明 (B, B')

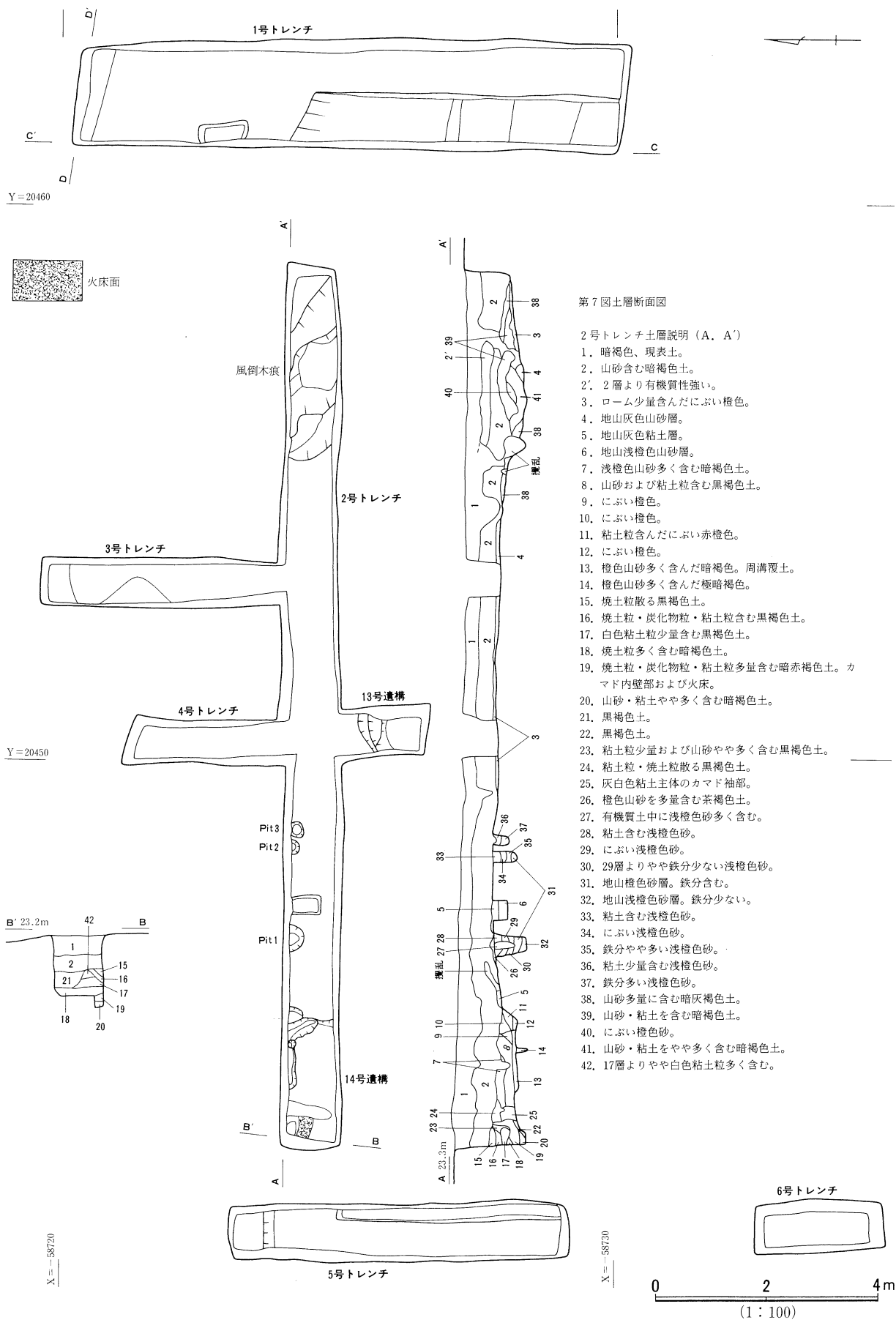
1. 黒赤褐色土。有機質性強く5mm大の焼土ブロック多く散る。
2. 赤褐色土。焼土中に褐色土少量混じる。
3. 明赤褐色。1cm大のロームブロック多量散る。

土層説明 (C, C')

1. 5mm～2cm大のロームブロック多く含む茶褐色土。
2. 2cm大のロームブロック少量散る茶褐色土。
3. 5mm～2cm大のロームブロック多く含む暗褐色土。
4. 5mm～3cm大のロームブロック多量含む茶褐色土。
5. 暗褐色土。
6. 2mm～5mm大のロームブロック多く含む暗褐色土。
7. 6層よりやや褐色味強い。
8. 5mm～2cm大のロームブロック多く含む茶褐色土。
9. 暗褐色土。
10. 2mm～5mm大のロームブロック少量含む暗褐色土。
11. 2mm～5mm大のロームブロック多く含む暗褐色土。

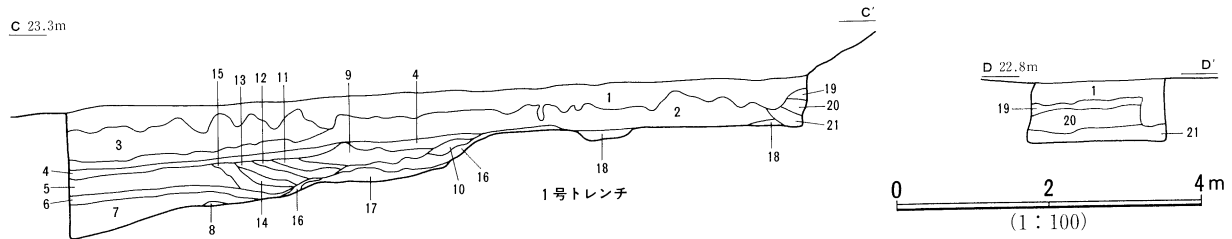


第6図 7・8・9・10・11・12号遺構配置図



第7図 1・2・3・4・5・6号トレンチ配置図

C 23.3m



1号トレンチ土層説明 (C, C')

1. 暗褐色、現表土。
2. 焼土粒・炭化物粒・粘土粒・山砂を含んだ暗褐色土。
3. 焼土粒・炭化物粒含む暗褐色土。
4. 粘土粒・山砂含む黒褐色土。
5. 1cm大粘土ブロック・5mm大ロームブロック・山砂・炭化物粒含む黒褐色土。
6. 山砂やや多く含んだ黒褐色土。
7. 小礫・山砂多量含んだ暗褐色土。
8. 地山浅橙色砂層。
9. 山砂少量含む黒褐色土。
10. 灰色山砂含む暗褐色土。

11. 極暗褐色土。
12. 暗褐色土。
13. 12層より褐色味強い暗褐色土。
14. 13層より褐色味強い暗褐色土。
15. 暗茶褐色土。
16. 若干有機質土を含んだ灰色砂。
17. 地山灰色砂層。
18. 地山浅橙色砂層。
19. 浅橙色山砂を多量含んだ茶褐色土。
20. 黒褐色土。
21. 炭化物粒少量含む黒褐色土。

第8図 1号トレンチ土層断面図

3号遺構 (第5図)

円墳周溝。内法径11m、外法径15mを測るやや楕円形を呈した円墳である。周溝部の掘込みは確認面から約20cmと浅い。主体部は確認できず、遺物も周溝の覆土内から若干出土したのみであり、共伴を認め得るものは見られない。

6号遺構 (第5図)

道遺構。5号・7号遺構埋没後に敷設されている。間層をはさみ新旧2層の硬化面が認められる。

8号遺構 (第6図)

道遺構。硬化面が2条並走する。8号遺構埋没後に敷設されている。

10号遺構A・B (第6図)

掘立柱建物跡。A・Bともに2間×2間で、建替えが想定されるが新旧関係は不明である。

11号遺構 (第6図)

竪穴住居跡。周溝が巡り、炉周辺の床面が硬化する。柱穴は確認されなかった。南側は壁が現存せず、範囲は不明である。11・12号遺構により切られている。共伴を認め得る遺物の出土は見られなかった。

(2) 台地斜面部 (第7・8・9・10・11・12図)

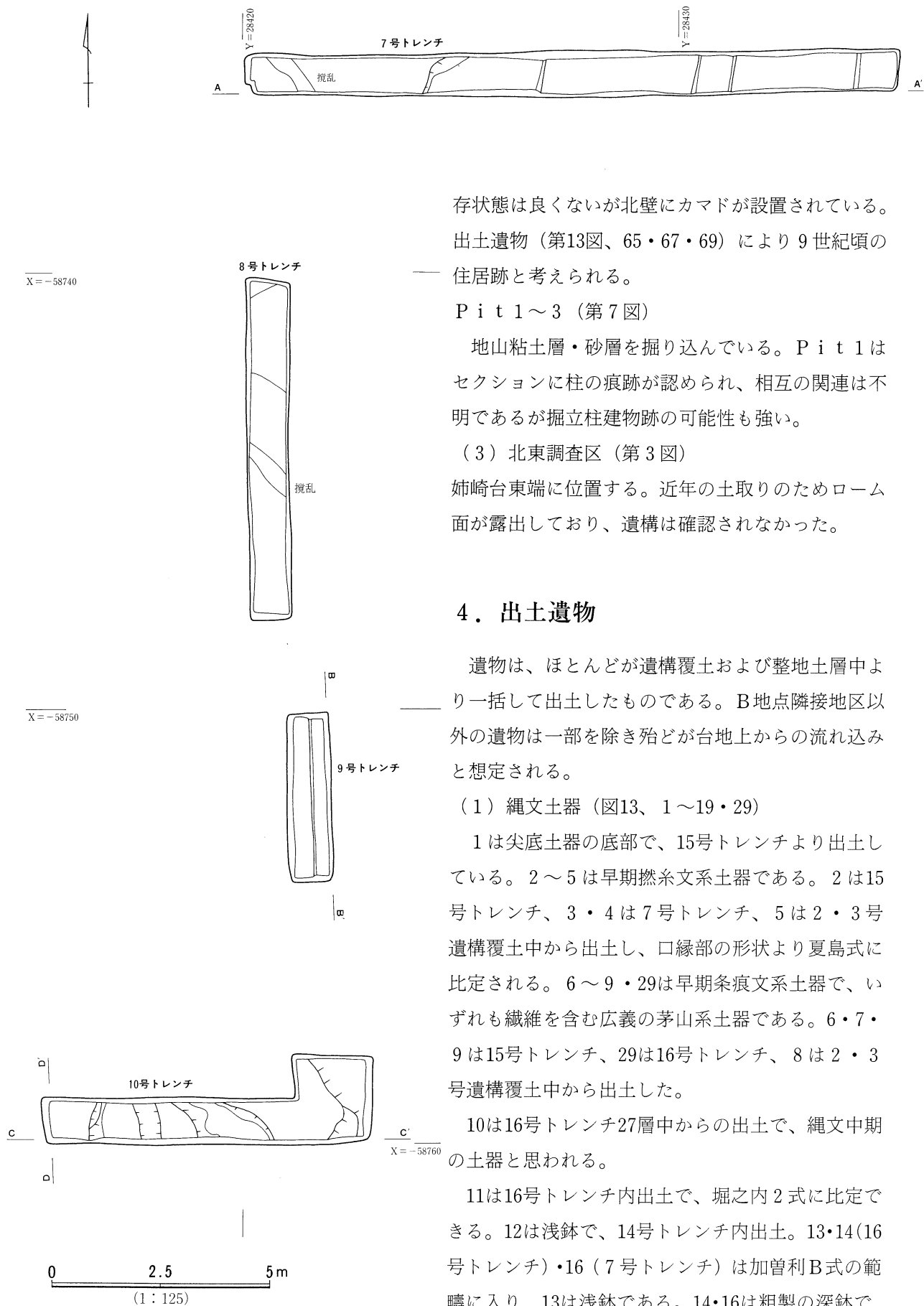
この調査区では16本のトレンチを設定し、2・4号トレンチより竪穴住居跡2軒・ピット3基を検出した。16号トレンチ南側のテラス状整地遺構(15・16号遺構)は覆土中に土器を多量含み、焼土粒も認められることから竪穴住居跡の可能性も指摘し得る。しかし出土遺物の時代性が一貫せず、床も確認できないため整地遺構とした。基本的に、橙色系砂層、浅橙色粘土層、地山ローム層、耕作攪乱旧表土層、現表土層の順に堆積が見られるが(第12図)、度重なる切り土・盛り土整地のために大半のロームが失われている。

13号遺構 (第7図)

竪穴住居跡。極めて部分的な検出のため遺構の範囲・時期などは不明である。遺物も見られない。

14号遺構 (第7図)

竪穴住居跡。方形を呈し、北壁下場に周溝を有する。南半分は切り土整地のため消滅している。遺



第9図 7・8・9・10号トレンチ配置図

存状態は良くないが北壁にカマドが設置されている。
出土遺物（第13図、65・67・69）により9世紀頃の
住居跡と考えられる。

Pit 1～3（第7図）

地山粘土層・砂層を掘り込んでいる。Pit 1は
セクションに柱の痕跡が認められ、相互の関連は不
明であるが掘立柱建物跡の可能性も強い。

（3）北東調査区（第3図）

姉崎台東端に位置する。近年の土取りのためロー
面が露出しており、遺構は確認されなかった。

4. 出土遺物

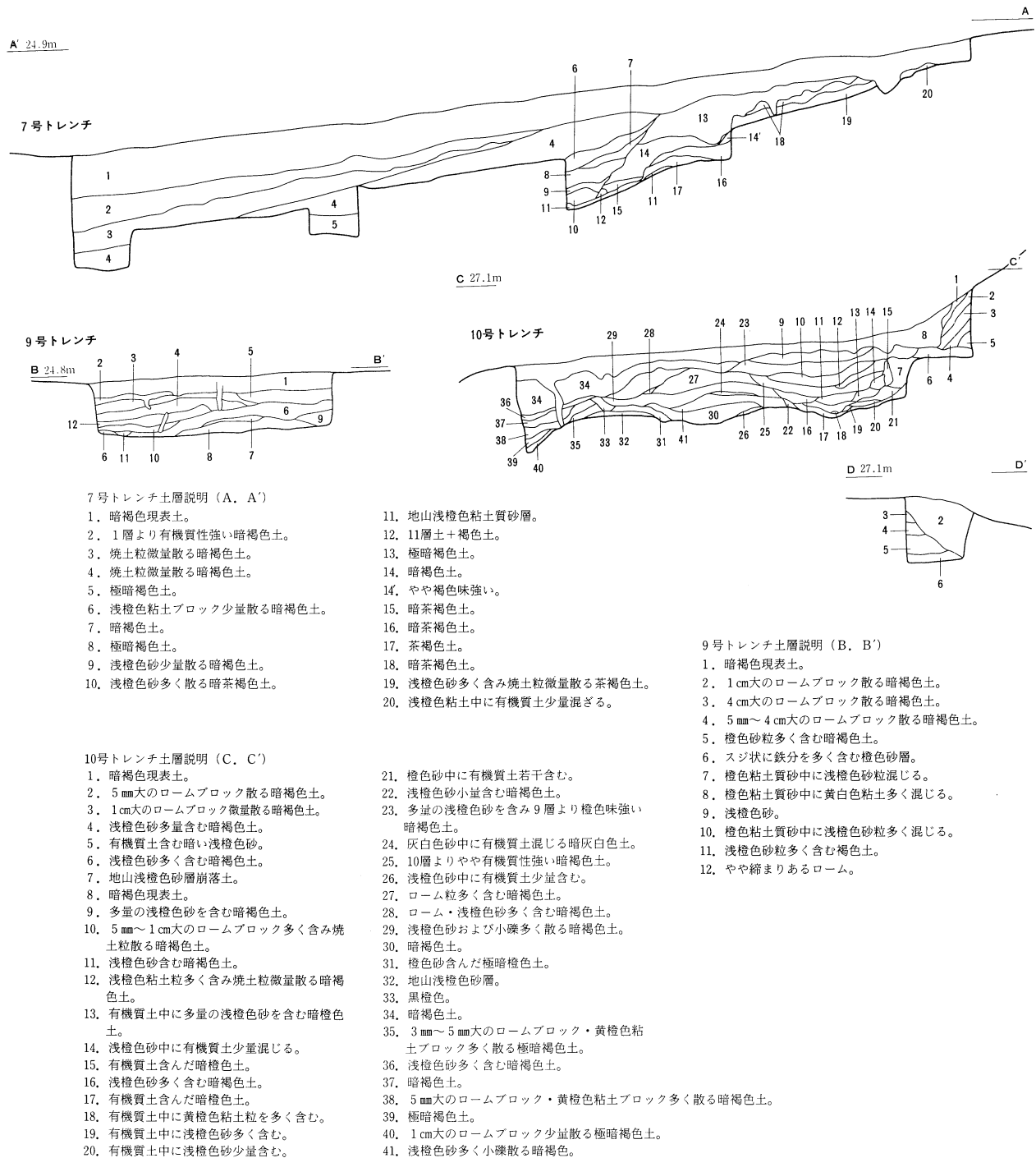
遺物は、ほとんどが遺構覆土および整地土層中よ
り一括して出土したものである。B地点隣接地区以
外の遺物は一部を除き殆どが台地上からの流れ込み
と想定される。

（1）縄文土器（図13、1～19・29）

1は尖底土器の底部で、15号トレンチより出土し
ている。2～5は早期撚糸文系土器である。2は15
号トレンチ、3・4は7号トレンチ、5は2・3号
遺構覆土中から出土し、口縁部の形状より夏島式に
比定される。6～9・29は早期条痕文系土器で、い
ずれも繊維を含む広義の茅山系土器である。6・7・
9は15号トレンチ、29は16号トレンチ、8は2・3
号遺構覆土中から出土した。

10は16号トレンチ27層中からの出土で、縄文中期
の土器と思われる。

11は16号トレンチ内出土で、堀之内2式に比定で
きる。12は浅鉢で、14号トレンチ内出土。13・14（16
号トレンチ）・16（7号トレンチ）は加曽利B式の範
疇に入り、13は浅鉢である。14・16は粗製の深鉢で、
地文縄文上に連続する沈線が施される。15は7トレ

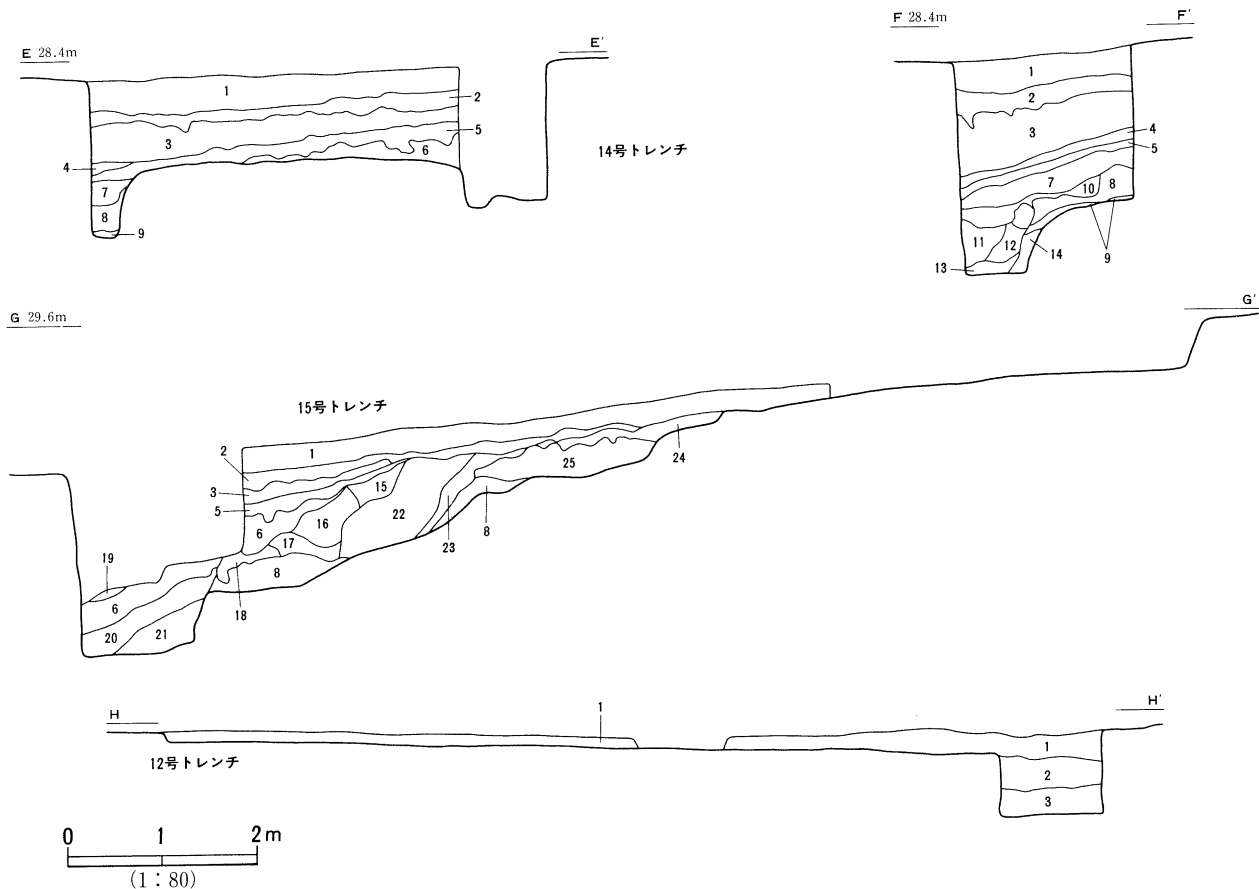


第10図 7・9・10号トレンチ土層断面図

ンチ出土。17 (16号トレンチ) は安行1式の深鉢、18 (11号遺構) は安行式の粗製深鉢である。19 (11号トレンチ) も粗製の深鉢であるが、口縁下方外面に杵状文が施されており、晩期の安行3b以降に比定される。

(2) 弥生土器 (図13、20～52・54・55・60)

20～28は弥生中期の宮ノ台式で、20～25が壺、26が甕、27が台付甕である。23は縄文部の沈線による区画がなく、若干古い様相を呈する。26・27は外面をハケにより撫で上げている。28は深鉢で、ハ



16号トレンチ土層説明 (A・A')

1. 暗褐色現表土。
2. 焼土粒少量含んだ暗褐色土。
3. 暗褐色土。
4. 焼土粒微量含む茶褐色土。
5. 暗茶褐色土。
6. 茶褐色土。
7. 焼土粒・炭化物粒少量散る黒褐色土。
8. 1cm大のロームブロック・焼土粒少量散る黒褐色土。
9. 黒褐色土。
10. 焼土粒散る極暗褐色土。
11. 暗茶褐色土。
12. 3mm大のロームブロック散り浅橙色粘土少量混じる暗茶褐色土。
13. 暗褐色土。
14. 暗茶褐色土。
15. 3mm大のロームブロック多量含む焼土粒少量散る茶褐色土。
16. 3mm大のロームブロック多量含む焼土粒少量散る極暗褐色土。
17. 2mm～1cm大の浅橙色粘土ブロック散る暗褐色土。
18. 暗褐色土。
19. 浅橙色粘土と有機質土が混在した土。
20. 暗褐色土。
21. 焼土粒微量散る暗褐色土。
22. 暗茶褐色土。
23. 1cm大の浅橙色粘土ブロック少量散る暗褐色土。
24. 茶褐色土。
25. 暗褐色土。
26. 暗褐色土。
27. 焼土粒少量散る暗茶褐色土。
28. 暗茶褐色土。
29. 地山浅橙色粘土層。
30. 暗褐色土。
31. 浅橙色粘土少量混じる暗褐色土。
32. 明茶褐色土。
33. 多量の浅橙色粘土混じる明茶褐色。
34. 焼土粒少量散る暗褐色土。
35. 茶褐色土。
36. 焼土粒微量含む暗褐色土。
37. 焼土粒微量含む茶褐色土。
38. 焼土粒微量散る暗褐色土。
39. 焼土粒やや多く含む暗茶褐色土。
40. 暗褐色土。
41. 3mm大のロームブロック多く散る暗褐色土。
42. 茶褐色土。
43. 焼土粒少量散る茶褐色土。
44. 暗褐色土。
45. 暗褐色土。
46. 茶褐色土。
47. 焼土粒やや多く含む暗褐色土。
48. 3mm大のロームブロックが均一に散る暗茶褐色土。

15号トレンチ土層説明 (D, D')

1. 茶褐色現表土。
2. 黒褐色土。
3. 極暗褐色土。
4. 3mm大の焼土ブロック少量散る極暗褐色土。
5. 1mm～5mm大のロームブロック多量含む焼土粒少量散る暗褐色土。
6. 3mm大のロームブロック多く散る暗褐色土。
7. 暗褐色土。
8. 茶褐色土。
9. 浅橙色粘土多く含んだ褐色土。
10. 9層よりやや褐色味強い。
11. 地山浅橙色粘土層。
12. 3mm大のロームブロック多く散る暗褐色土。
13. 暗茶褐色土。

13・14号トレンチ土層説明 (E, E')

1. 地山暗褐色表土層。
2. 極暗褐色土。
3. 5mm大の焼土ブロック少量散る。
4. 極暗褐色土。
5. 極暗褐色土。
6. 焼土粒微量含む暗褐色土。
7. 浅橙色粘土少量含む極暗褐色土。
8. 地山浅橙色粘土層。
9. 地山浅橙色砂層。
10. 黒褐色土。
11. 茶褐色土。
12. 橙色砂多量含む。
13. 橙色砂多く含む暗褐色土。
14. 地山浅橙色砂層。
15. 暗褐色土。
16. 暗褐色土。
17. 暗褐色土。
18. 5mm大の焼土ブロック少量散る暗褐色土。
19. 暗茶褐色土。
20. 暗褐色土。
21. 茶褐色土。
22. 茶褐色土。
23. 茶褐色土。
24. 地山ハードローム層。
25. 粘性あり赤褐色を呈する地山ローム層。

12号トレンチ土層説明 (H, H')

1. 暗褐色現表土。
2. 地山ハードローム層。
3. 粘性あり赤褐色を呈する地山ローム層。

第12図 12・13・14号トレンチ土層断面図

ケ整形の上に櫛描による横羽状文が施される。20・22・23は16号トレンチ、21は5号トレンチ、24・28はB地点隣接地区全体から一括で、25は2・3号遺構、26・27は2号遺構より出土した。

30～49・59は弥生後期と考えられ、それぞれ2号・3号遺構から33・38・44、11号遺構から34、B地点隣接地区全体から一括で31・32・35・40・41・44・45、5号トレンチから59、7号トレンチから48、14号トレンチから36・37・39、16号トレンチから42・46・60が出土している。30・32は甕頸部および口縁部で装飾的に輪積み痕を残す。32は複合部に縄文原体による押捺が見られる。31・33は浅鉢で、複合口縁下端に縄文原体による押捺が施される。33は口唇部から口縁外面にかけて単節羽状縄文が施される。34は甕で、口唇部が指頭による内側からの押捺で波状化している。35～49は壺である。複合口縁（35～40）を呈し、幅広い縁帯を形成し縦に粘土紐を張りつけるもの（35）と、縁帯の幅が短く下方に縄文原体による押捺を施すもの（36～40）が見られる。41は竹管による押捺を施した円形浮文を持つ頸部である。その他、42は結節文区画による単節羽状縄文が、45は複合鋸歯文が、46には山形文がそれぞれ施文されている。60は高坏坏部で、外面縦方向、内面横方向にヘラミガキが施される。

43・50・51・54・55は弥生終末期ないしは古墳前期と考えられる。それぞれ2号・3号遺構から44・50、2号遺構から54・55、7号トレンチから51が出土している。43は壺で、単節羽状縄文上に沈線による鋸歯文が施される。50・51は甕で、50は口唇部に棒状工具による交互押捺が施される。51には頸部に凸帯を有し縄文原体による押捺が施される。内外面とも密にミガキが入り、口唇部は面取りされている。54・55は浅鉢または高坏坏部である。54は口唇部が面取りされている。56～58は壺ないし甕底部で、時期などは不明である。58（2号トレンチ）はハケ目が認められるため弥生終末期から古墳前期と思われる。

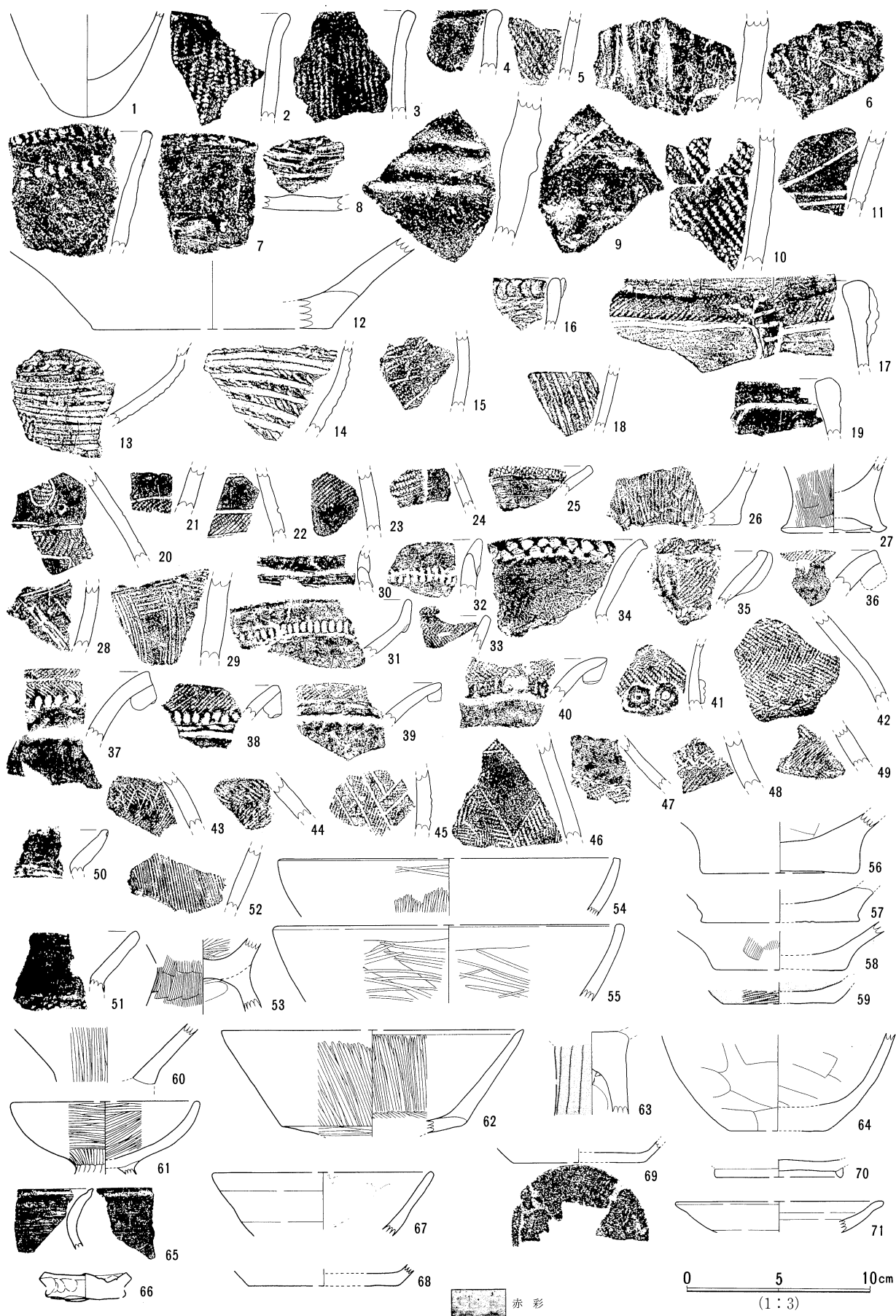
（3）土師器（図13、53・61～71）

それぞれ2号遺構より64・71、3号遺構より61、7号遺構より66、1号トレンチより62、14号遺構より65・67・69、5号トレンチより53・68・70、7号トレンチより63が出土している。61は古墳時代前期前半の開脚高坏、62は前期後半から中期前半に見られる高坏である。後者の場合、口唇部内面を面取りした形状より弥生終末期に遡る可能性もある。63は鬼高式の高坏脚部で下部を欠く。内面を指頭で横撫でし、接合部に爪跡がつく。全面赤彩される。64は長胴形甕の腰部と思われ、内面ヘラ撫で、外面ヘラ削り整形が施される。66は手捏土器で、口唇部に面取りを施す。時期は全く不明である。65は常陸型甕、67～69はロクロ土師器で、9世紀後半のものと考えられる。67は全面ロクロ整形に伴う横方向の撫でが入り、油煙痕を残す。68・69は外面底部から腰部にかけ右方向の回転ヘラ削り調整が施される。70は土師器碗で付け高台を有し、底部内面は横撫で、外面は回転ヘラ削りの後指頭による横撫でを施す。71は土師器坏で、70と共に10世紀後半と考えられる。

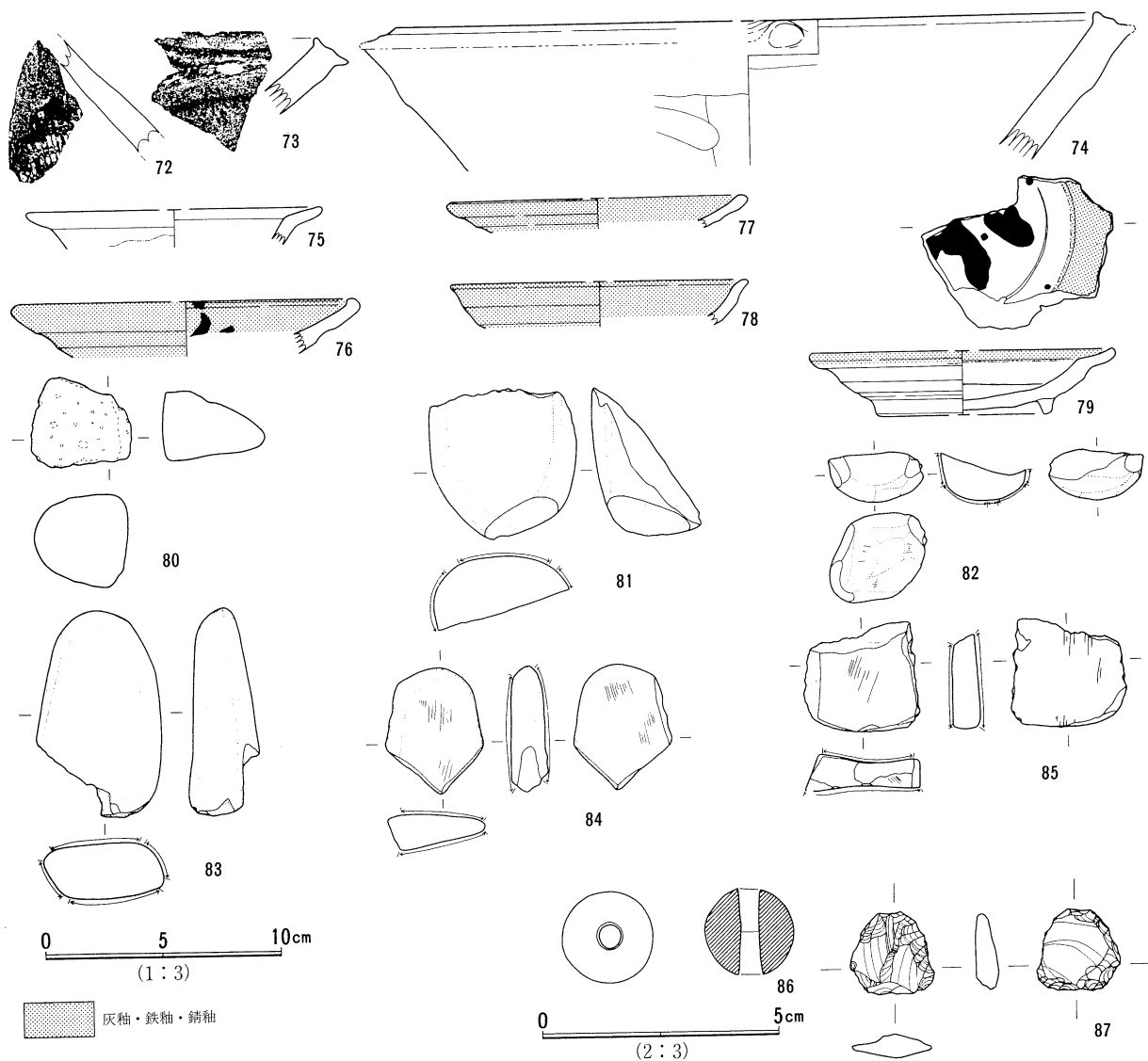
（4）中・近世陶器（図14、72～79）

2号トレンチから78が、7号トレンチから72・73が、10号トレンチから74・77・79が、12号トレンチから76が、それぞれ出土している。72～74は中世の常滑産製品である。72は甕肩部で、輪積み接合部上に格子状の叩きを施し、押印帯を形成するものと思われる。73・74は所謂壺・甕系片口鉢で、口縁端部が突出し口縁平坦面は幅広い。16世紀前半ごろの生産と思われる。

75～79は近世瀬戸・美濃産施釉陶器であり、連房式登り窯による生産品と思われる。75は端反りの



第13図 東原遺跡C地点出土遺物実測図1



第14図 東原遺跡C地点出土遺物実測図2

志野皿で、長石釉が施釉される。76は皿で、鉄絵の上に錆釉を施す。外面には錆釉の刷毛目が明瞭に見られる。棒状工具で口縁端部を突出させ、口縁下方外面に凹みを廻らす。77・78は灰釉および鉄釉の皿である。78は外面を回転ヘラ削り調整し、口唇部は玉縁状に引き出している。79は灰釉折縁蘭竹文皿である。底部からやや内湾気味に開き、口縁で折れる。底部から体部外面にかけて回転ヘラ削り調整を施し、断面台形でやや高い付け高台を有する。見込に太筆による鉄絵蘭竹文を描き、上から薄く灰釉を刷毛塗りする。口縁内面外反部より口唇部外面に至り、更に灰釉を施釉する。体部外面および底部外面は無釉。重ね積み焼成で、見込に輪状の高台痕跡が残る。登り窯第Ⅲ期（17世紀後葉～18世紀前葉）に比定できる。

(5) 石器 (図14、80～87)

2号遺構から84が、7号トレンチから82が、5号トレンチから85が、15号トレンチから81・83が、16号トレンチから80・86・87が出土している。80は軽石製品で、浮きの可能性がある。穿孔は認められない。重量は8.9gである。81～83は磨石で、それぞれ149.5g・36.7g・162.5gを量る。すべて砂岩であるが、81のみ微粒子で、他はやや粗い。84・85は砥石で、40.2gと39.3g。前者が砂岩、後者

が凝灰岩である。86は蛇紋岩製の玉で、両面から穿孔しており、8.9gを量る。87は1.7gで黒曜石を加工する。

5. 結び

今回の調査は僅か500m²という限られた範囲に限定されたため、遺跡の性質を明らかにするには至らなかった。今後、隣接地における調査成果の蓄積が待たれるところである。

斜面部の層序としては、12号トレンチで現表土下にハードローム面が確認された。13号トレンチ中より東側では切り土整地のためローム層が失われ、浅橙色粘土層および橙色砂層が整地下層の地山となる。しかし2号トレンチ内の13・14号遺構は地山浅橙色粘土層・橙色砂層を掘込んで構築されており、切り土による遺構破壊がそう深くなかったことが知れよう。また、このことより整地以前から斜面部下方にローム層の堆積が無かったか、またはきわめて薄いものであったと推測される。整地は切り土・盛り土が幾度か繰返されており、現在の帯曲輪状地形に至る。段築の斜面部はかなりの急勾配を呈するが、整地以前の14号遺構が構築された段階では、全体になだらかな斜面地であったと考えられる。中近世の陶器が出土しているものの、これらの整地がいつの時代になされたかは不明である。出土遺物には昭和以降の土瓶なども含まれ、最近まで土が動かされていた事実が確認できる。なお、この整地面は昭和30年代頃まで桑畑として利用されていた。

先に述べたごとく、東原遺跡C地点は畑木城と谷を隔てて隣接し、養老川下流域に面する要地に所在することなどから、中世城郭関連遺跡の可能性がある。しかし現在において、伝承や文献史料などによりこれを確認することはできず、今回の調査成果も裏付けになし得るものでない。仮に東原遺跡の整地跡を中世城郭遺構と捉えた場合、姉崎台自体が城郭であったのか、それとも畑木城の縄張りに包括されるべきものなのか、または中世における姉崎神社関連の遺構なのか、幾つかの推測がなし得る。中世の足跡としては、姉崎台南西部に「馬場」という字がある。これは姉崎神社関連の地名であろう。また、字「台ノ東」所在の円能寺墓地内に戦国期の伊豆産安山岩製五輪塔空風輪が1基のみ存在する。姉崎台東南部斜面に帯曲輪状の整地が観察できるものの、姉崎台を中世城館跡と認める積極的根拠は現状で乏しい。

一方、畑木城跡は畑木砦跡、要害山城跡とも呼ばれ、要害・堀之地などの字名が残っている。台地上の平場を囲む形で一部土塁が残存し、斜面には幾重にも帯曲輪が廻る。南方の尾根伝いを椎津城への連絡道と見做し、椎津城の出城と位置付ける意見⁽¹⁾もあるが定かでない。台地上には戦時中、陸軍により高射砲用対空照明機が設置されており、その時点での削平も考慮せねばならないが、城の構造自体はやや古いようで、戦国時代前半頃のものと考えられる。台地東麓に妙見寺があることから、千葉氏系在地領主による築城の可能性もある。城の規模は明らかでないが、谷により両側から開析された独立丘に近い台地先端部（要害山と呼ばれる）上を主郭とする小規模な砦のようで、向かいの姉崎台まで曲輪を廻らす状況は考えがたい。椎津城の出城とするより、在地領主による本領支配の城と考えるべきではないかと思われる。やや奥まった東側谷に面する妙見寺付近を「堀ノ地」と呼ぶことから、この辺りを領主の居館とし、要害山は詰城として機能していた可能性がある。妙見寺に該当期の石造物などは確認できないが、谷の南奥、字寺谷所在の医王寺（真言宗豊山派）には15世紀から16世紀に

かけての伊豆産安山岩製小型五輪塔・宝篋印塔残欠群がある。なお、医王寺墓地内には南北朝期の大型宝篋印塔（基部を欠く）が1基存在する。更に谷の南東部は「木戸脇」と呼ばれており、東側谷全体と畑木城がセットとして捉えられるものと考えたい。

以上、やや脱線したが畑木城の概要を簡単に記してみた。東原遺跡を畑木城の関連施設と捉えるにはやや難があるが、今回の調査で若干ながら中世の遺物も出土しており、姉崎台に中世遺跡、例えば城館跡などが存在する可能性を完全に否定し得るものではない。この問題に対しては今後の調査に期待したい。

注釈

- (1).『上総の古城めぐり』上巻、府馬 清著、有峰書店新社、昭和52年発行・『市原のあゆみ』市原市教育委員会、昭和48年発行。

姉崎二子塚古墳

畑木城跡

姉崎天神山古墳

姉崎東原遺跡





B地点隣接地区全景



1・2・3・4号遺構配置状況



2号遺構土層断面A



2号遺構土層断面B



ピット群配置状況



5号遺構土層断面C



5号・6号遺構全景



8号遺構全景



10号遺構全景



11号遺構全景



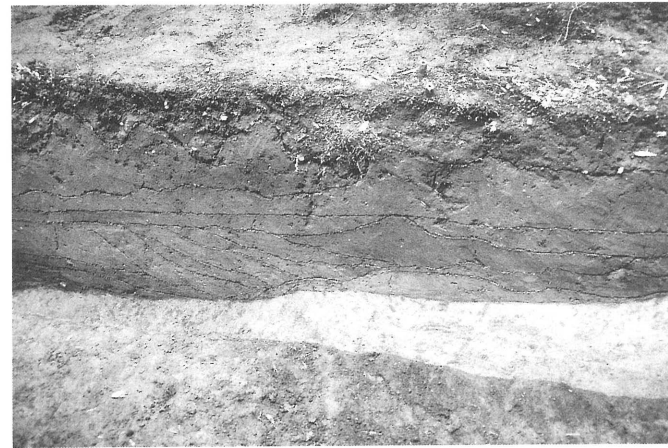
11号遺構炉土層断面B



12号遺構全景



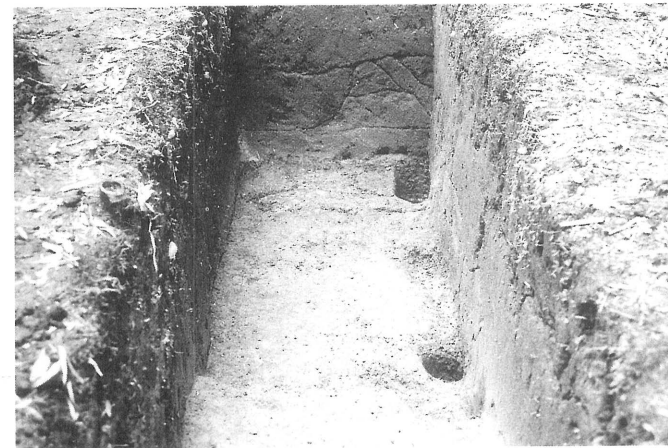
1号トレンチ全景



1号トレンチ東壁土層断面C



2号トレンチ全景



14号遺構検出状況



14号遺構カマド検出状況



2号トレンチPit 1



7号トレンチ全景



7号トレンチ南壁土層断面



8号トレンチ全景



9号トレンチ全景



9号トレンチ東壁土層断面



10号トレンチ全景



10号トレンチ南壁土層断面



10号トレンチ北面切土



11号トレンチ全景



12号トレンチ全景



12号トレンチ南東部土層断面



13号トレンチ全景



14号トレンチ全景



14号トレンチ西壁土層断面



14号トレンチ南面地山粘土層露出部



15号トレンチ全景



15号トレンチ西壁土層断面



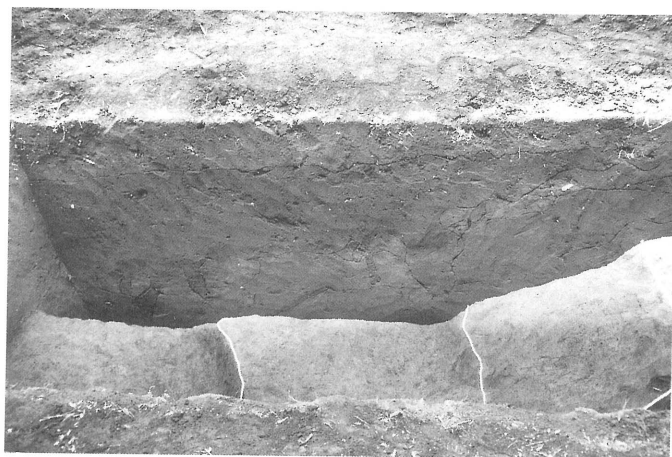
16号トレンチ全景



16号トレンチ東壁土層断面



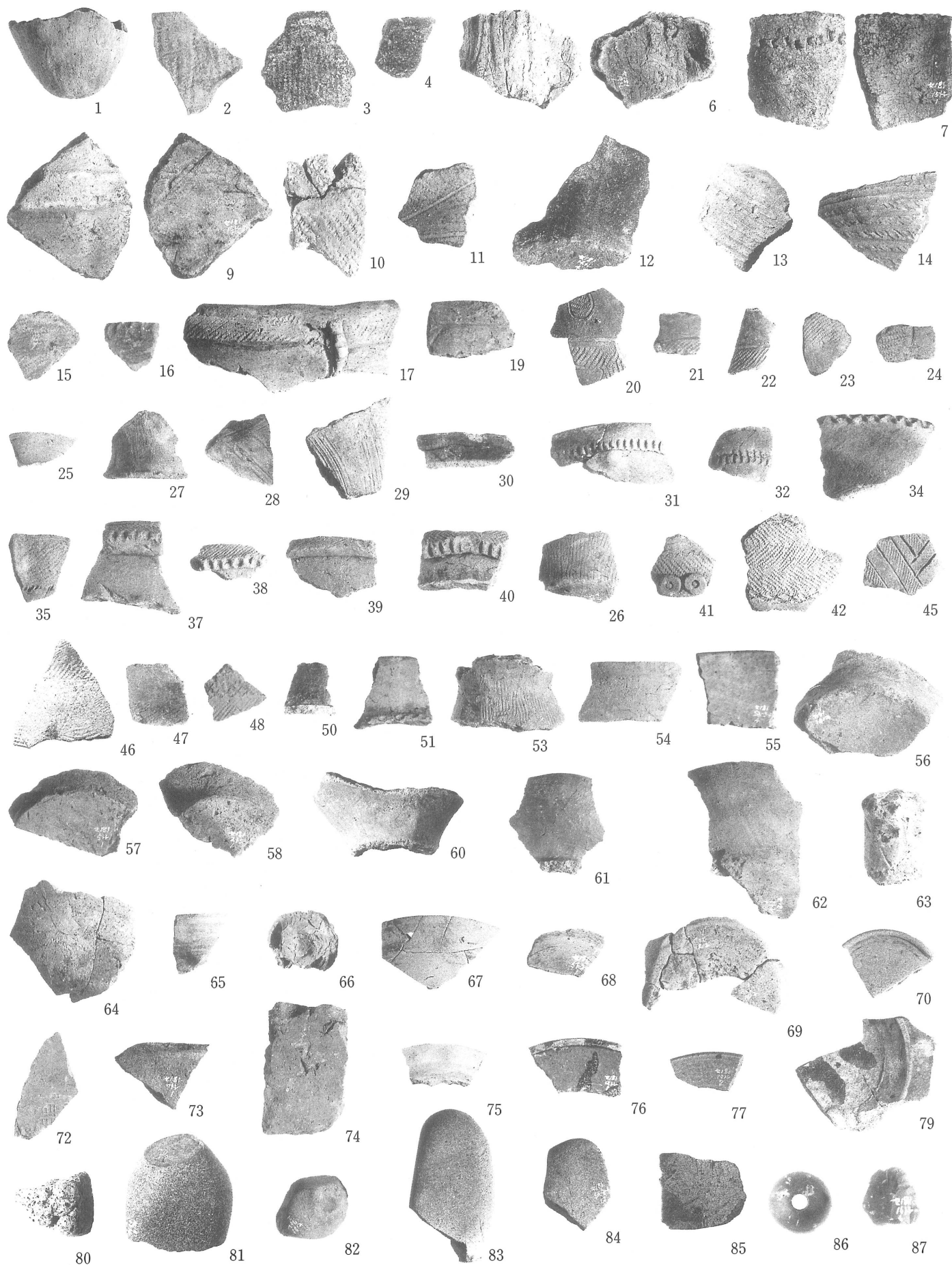
16号トレンチ盛土整地断面



16号トレンチ西壁土層断面



北東調査区全景



報告書抄録

ふりがな	いちはらしあねさきひがしはらいせき							
書名	市原市姉崎東原遺跡C地点							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第54集							
編著者名	櫻井 敦史							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290 千葉県市原市能満1489番地						TEL 0436 (41) 9000	
発行年月日	1994年11月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あねさきひがしはらいせき 姉崎東原遺跡	千葉県市原市姉崎 2720-3地先 他	12219	330	35度 28分 13秒	140度 3分 30秒	19940203) 19940322	500	宅城造成 に伴う事 前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
あねさきひがしはらいせき 姉崎東原遺跡	集落跡	弥生時代後期) 平安時代初頭	古墳 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土壇 溝 道跡	1基 3軒 2棟 4基 4条 3条	縄文土器、弥生土器、 土師器、中世埴器、 近世陶磁器、石器な ど		台地上は弥生時代後 期に集落が営なまれ、 古墳時代になると墓 域になる。斜面部は 9世紀に竪穴住居が 構築されたほか、現 代に至るまで度重な る整地を受けている。	

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第54集

市原市姉崎東原遺跡C地点

平成6年10月24日 印刷

平成6年11月1日 発行

編 集 財団法人 市原市文化財センター

発 行 株式会社 大 和 建 設

財団法人 市原市文化財センター
千葉県市原市能満1489番地
TEL 0436 (41) 9000

印 刷 株式会社 弘 文 社
千葉県市川市市川南2-7-2
TEL 0473 (24) 5977